



In-war-mation and Die-brary

江上 敏哲

日常と非日常のあいだ

昨年の夏（2002年8月）にISIに見学に行ってきました。ISI つつつても一ツ橋パレスサイドじゃないです、フィラデルフィアの本社のほう。

ISI は専門のデータ入力用ファクトリーというのをニュージャージーに持ってらっしゃるのですが、聞くところによればもうひとつ、アイルランドにも同様のファクトリーがあるんだそうです。曰く、作業分担のため、だけでなく、リスクヘッジのため。災害や非常時に備えて、片方が機能しなくなってももう片方にデータのバックアップがある、作業も続行できる、被害を最小限に食い止めることができる、と。非常時とはなんでしょう、火災、天候、システムダウン、スト、テロ、戦争、etc。

別の機会にワシントンへも行ったことがあります、ニューヨークにくらべて空がひろびろとしてる印象を受けました。LC にしろ文書館にしろ建物が高層でないし、道路や緑地がかなりゆったりと幅広くとられているからなんでしょう。そこまでならまださわやかなお話なのですが、さて、なぜ高層にしないのか、守るべきものを地下に置く理由は何か、道路・緑地の非常時の用途は何か、とまで巡らせますという、一気にうすらさむくなってしまいます。要するに“はなっから準備済み”。LC なんか、まだ9.11 以前でしたが、幾度となくボディチェック&手荷物チェックされたものでした。日本みたいにチェックしなすぎなのもどうかと思いますが。

(次頁へ)

[目次]

In-war-mation and Die-brary	江上 敏哲	...	1
大図研京都数珠つなぎ 第65回	谷 愛子	...	5
支部委員からひとこと(2)		...	6
2002年度会費納入のお願い		...	8

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール : dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL : <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

古代ギリシャの悲劇詩人・アイスキュロスの言葉だそうです、「戦争の最初の犠牲者は“真実”である」。図書館と戦争とが結びつけられるとき、たいていは「知的自由」「情報への介入」「中立性」「戦時文献」的なテーマで言及されてます。されてますが、すみません、テーマが大きい&先行研究が多すぎて、ちょっとやそっとじゃものが言えないです。

多忙な図書館業務に埋没してしまってる身ではありますが、同時代に生きる者の責務として、遠ざけたり目を伏せたり忘れたふりをしたりせずに、日常的なレベルで向き合える話題ってないんだろうか。例えば酒の席とかメールのおしゃべりとか、支部報になんか書いてよと言われて先延ばしにしてるうちに締切間際になって思いつきで書かなきゃなんなくなっちゃったときとか、そんなレベルでもいいから、でも遠ざけずに。しかも図書館・本・情報とからめて。

そういう、まあ平和ボケ世代のやりがちな、ぬる〜いお話です、ごめんなさい。

記録と記憶のあいだ

瀬戸内寂聴はおっしゃいます。個人個人があげる声は、現在のこの大勢の動きに対して無力であろう。が、この時代にそういう声があげられたという“記録”が残ることは、のちの世に対して有力なはずだ、と。ほんとか？とは思うのですが、どうせならのちの世のことまで考えるほうが、ちょっとは気がましかもしれません。

ドラマ『ビバリーヒルズ高校白書』にて。登場人物のひとりである娘・ブレンダは、ある日、ひよんなきっかけで30年前のとある娘・ウェンディの日記を見つけます。1968年、ベトナム戦争の時代。このころのアメリカ市民の様子が克明に描写されているわけです。親友同士が反対・賛成でいがみ合い、恋人も自分も反戦運動で逮捕され、賛成派の兄は、反戦派のウェンディと喧嘩別れしたまま、ベトナムへ出征してしまう。感情移入した現代の娘・ブレンダは、図書館司書の助けを借りてウェンディの現住所をつきとめ（それもどうかと思うがさておき）、会いに行く。彼女の兄は結局帰還しなかったとのことで、戦地から彼女に送られてきた手紙がまたせつないので、何かの折にビデオでも借りて御覧になってください。

9.11の当時、江上は目録業務に携わっておりまして、17～19世紀のドイツの教育学文献コレクション、という半貴重書的なものを整理しておりました。おそらくは出版以降幾多の戦禍を経験し、京都までたどり着いたのでしょう。1冊1冊手にとって、標題紙だ標題紙裏だVorredeだとかを丹念に眺めてますという、なんというか、これを書いた人、出版した人たちの、書きたいんだ、出版したいんだという気持ちがピンピンと伝わってくるんです。フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』とか。ペスタロッチ思想の実践がどうのこうのとか。親書誌に混乱があったり、図版の数に異同があったりするとともにまた、携わった人々の手遣い、息遣い、出版行為の生々しさを感じるものです。著者も出版者も亡くなってるし、これを手にとった人々も多くは亡くなっている、或いは戦争で命を落としている人も少なくない。なのに、へたすると心臓が痛くなってくるほどに、その人たちの気持ちが力強く伝わってくるような気がします。通常の遡及入力程度の本だあって、気持ちに変わりはありません。

蓄積された叡智を次代に伝え残す手段として、人は、文字や本を生み出しています。それを確実に継承していく手段として、図書館というシステムが存在します。よく「図書館は死体置き場だ」などという論が発言されたりもしますが、とんでもない。たくさんの、あらゆる時代の、とっくに死んだ人たちの気持ちが、こんなにも直接的にビビッドに伝わってくる場所なんて、そうは見当たらないでしょう。それを死体置き場と言うのなら、大いに結構。

人間の叡智が、死も暴力も戦争をも乗り越えられる、その証拠が、図書館にある。江上はそう信じます。

継承と亡失のあいだ

なあんて↑えらそうなことを言ってみても、灰燼に帰しては元も子もありません。遠く異朝を

訪えば、秦では焚書の憂き目を見、アレクサンドリアの蔵書はアラブ人カリフの一声で風呂釜にくべられ、ルーヴアン大学の蔵書は2度の大戦で2度ともドイツ軍に焼かれてしまいました。

京都大学附属図書館は先の戦争（注：応仁の乱ではない）で蔵書を失わずにすんだことでも貴重なわけですが、当時の様子を『京都大学附属図書館六十年史』『京都大学百年史』その他でうかがってみました。検閲が始まったのだ、新築の着工が遅れたのだ、文献疎開だのとある中で、こういうことが書かれてあります。

すなわち、この手の時局に哲学書・宗教書が多く読まれたというのはよく語られることですが、開戦直後の1942年当時、“読書の方法論”に関する図書が多く読まれていた、と。こういうのもあります、戦争の拡大により、講義も完全には行なわれなくなってきた、そんなとき図書館はどうしたか。現代だと「じゃあうちらも経費削減がてら手え抜こうか」なんてしょっぱい論調が飛び出しかねないのですが、当時はちがう、講義が足りないだけに図書館利用が増えるはずだということで、学生希望図書を強化したと。あるいは、洋図書入手が困難になってきたってときにどうしたかということ、ドイツからトルコ経由で運ばれてきた図書について、海賊版を複製して所蔵に加えたという、むう、そこまではか。そしてもうひとつ、谷村文庫・新聞文庫・陶案文庫の寄贈、万葉集尼崎本・古今集注の国宝（現在の重文）指定もこのころ、いずれも現・貴重書室の重要な顔ぶれであります。

本を読みたいという強い欲求、とどまることのない学習・研究活動、あるいは、いにしえから連綿と受け継がれる資料があり、図書館はそのサポートを使命として果たす。物理的にはともかく、すくなくとも気持ち的にはぶっちゃけ必死でがんばってます、と。やるべきことをやるという姿勢や意志に、時局のちがいはないんだぞ、と、教えられる気がします。もちろん、自館史ですから多少は都合のいい記述でしょうし、いわゆる図書館の戦争責任云々に触れてないってのもあれなんです。

とはいえ、なにかと言い訳してはラクなほうに流れがちな昨今の図書館業界は、かの時代に対して胸張っていられるのでしょうか。都立図書館の問答無用な蔵書廃棄だの、意味ナシ理由による図書費削減だの、誰も古典籍をまともに扱えない、目録スキルが継承されない、そんなのは戦時下の緊縮や蔵書焼失とどこいじゃないのか。始皇帝やカリフやドイツ軍の野蛮さをなじる資格が我々にあるのか。ほかならぬ図書館員こそが冊子の破壊と亡失の片棒となっているのではないのか。戦争の悲劇が人間性の奪取にあるというのなら、昨今の図書館におけるこの脱人間性さ加減はどういうことなのか。

さて、当館にとって戦時最後のエピソード。1944年6月、いよいよ戦局激化ということで、図書の疎開が始まります。疎開先は大覚寺・保津村など。全作業に1年ほどかかりまして、ようやく最後の医学部分が疎開し終わったのが、翌年8月14日。え、次の日って……。

未読と死蔵のあいだ

このような時局でたびたび耳にするボキヤに「罪のない人」というのがあります。罪のない人なんてこの世にいるのか、などという哲学的疑問はとりあえず置いとくとして、罪があろうがなかろうが、毎日たくさんの人が亡くなっているということを思い出したいところです。地球上で年間5500万人、1日あたり約15万人。日本での年間死亡者数は約100万人、うちガンで30万人、自殺で3万人、交通事故で1万人（←このへんの対策のほうがよっぽど急務な気もしますが）。江上は現在30歳ですが、日本の30～34歳年間死亡者数は約6000人。矢田亜希子じゃなくなつて言いたくなります、「死ぬとわかってる男は彼だけじゃない。世の中の男、全員よ」と。

ドラマ『僕の生きる道』で、草なぎくん演じる高校教師は余命1年を宣告されます。生きるということについて深刻に考えるようになった草なぎくんは、ある日、読むつもりにしててついぞページをひらくことのなかった、1冊の本に気が付きます。彼はその本を手に、生徒たちに向かってこう語ります。「この本の持ち主は本を読む時間がなかったのでしょうか？ 多分違います。読もうとしなかった、それだけです。そのことに気付かない限り5年経っても10年経っても持ち主

はこの本を読むことはないでしょう」。

吉田兼好は『徒然草』第108段でこう説きます。ちょっとの間あでも能動的になんかしようて思わなんだら、そのちょっとの間あのあいだじゅうは、ゆうたら、もお生きてへんねん。死んでんのといっしょやねん。

わたしも図書館員ですから、「これから読むつむりの本」の5冊や10冊はすぐに挙げられます。いつ読むかは判りません。

ドラマ『金八先生』では、武田鉄也の息子が悪性リンパ腫と診断され、無菌室での闘病生活を送ることになります。武田鉄也は息子に1冊の本を渡します。『種まく子供たち』、小児ガンという難病と闘った7人の子供とその家族たちの手記です。が、完全にパニックってる息子は激情のあまりその本を投げ捨てるわけです、だってその子供たちは彼と同じように闘病生活を送った末、亡くなってるわけですから。その息子を、父は大声で叱りつけるのです。「世の中には命をかけて本を書く人がいる。命をかけて読んであげるのが人としての礼儀だろ!!」。

冷静と情熱のあいだ

9.11からのちの「白い粉」騒ぎ、日本ではそのほとんどが“騒ぎ”でしかなかったように思いますが、とある南国の国立大学図書館で大騒動が発生、というのがありました。外国雑誌のページの間から白い粉がこぼれ落ちた→大騒ぎ→閉館→どうということはない、てな経緯だったと記憶していますが、これをきいたとある印刷関係の知人がおっしゃるには、アホちゃうかと。雑誌だ印刷物だというのは、静電気のせいでページ同士がくっつくのを防ぐために、コーンスターチの粉を使ってる、んなもん常識じゃ、と。

一時の騒ぎ、という話で済ませられそうにも見えますが、江上はちょっとそうは思えないのです。だって「図書館」でしょ、仮にも「情報」を整理し取り扱い提供している社会的組織でしょ。何するにしたって冷静さを欠いてはいけないと思うんです。先の戦争（注：応仁の乱ではない）でだって、日本の図書館業界はあらゆる“冷静さを欠いた”行為や論調に染まってしまった、そのことは反省させられてきたはずです。しかるにこの事件、“知の欠落”が人から“冷静”さを奪った例の典型じゃないですか。

同じ意味で、個人的に危惧を、すんごく遠回りながら危惧を抱くのが、例の「複本購入批判」に対する図書館業界の反応であります。まあそもそも、図書館員というのは無駄にプライドの高い人種なので、外部からちょっと批判されたからといってヒステリックになってしまうというのも、情動的に判らないではないんですが、にしたってどうしてあんなっちゃったんでしょう。数字やグラフで論文もどきに仕立ててるかと思えば、平気で論拠ナシの感情的な言が飛び出したり、そんなもって自分で自分を「論理的」と標榜したり、「かの批判は感情論である」「安易である」「同調してる」「すりよってる」、勘弁してください、読むに耐えません。ほとんど「住民貸出は図書館の“正義”だ！ 同意しない図書館員はなんとかの枢軸だ！」的なノリだもん。

しかも、これがまた図書館員の悪いクセのような気がしてヤなんです、図書館員側からの反論ってどうしてこう揃いも揃って、カタギの目に触れない図書系雑誌・図書での発信なんでしょう。そんな閉じたコップの中でガヤやってたって、文藝春秋や新潮45に勝てるわけがない。いや、江上的には別に勝ってもらわなくて結構なんです。

そんなひきこもり系&冷静さを欠いた姿勢が、時局が時局ならどう転んでしまうのでありましようか。江上はいま、それがぼっけえきようてえのであります。ってゆってるこの場がまさに図書系メディアなのですが。

真理と自由のあいだ

そういえば、「情報」という日本語の初出は軍事文献であるとか、先の戦争（注：応仁の乱ではない）で米軍はNYPLの片隅にころがってた日本の電話帳で暗号を解読したとか、インターネット

の起源は米国国防総省のネットワークであるとかは、知ってる人には有名な都市伝説であります。日本のライブラリアンの祖である藤原定家（ほんとか？）は、『明月記』で「紅旗征戎わが事にあらず」を決め込んでますが、そうもいかないのでしょうか。

多忙な我が身にできることといえば、例えばアフガニスタンはカブール大学から見学に来た研究者に電子図書館のデモを披露してみたり、イスラム系古典籍資料を電子化して、かつ海外アクセス者のためにがんばって英文解題をあつらえてみたり。そんな折にはふと「真理が我らを自由にする」の標語が頭をかすめたりもするのですが、その標語も元は『新約聖書』だといいますから、どこの国の“真理”なんだか、気持ちは複雑です。

とある先生が、とある情報系の授業で、毎年印象深く語るエピソードがあります。アメリカでは図書館がとても身近である。あるホームドラマでの一シーンで、母親がちっちゃな娘に「もうすぐ選挙があるから、調べてきてほしいことがあるの」とおつかいに出す。娘は自転車で図書館に向かい、立候補者の経歴や発言が判る資料をなんなく入手することができる。図書館や情報リテラシーというのは、民主主義の基盤なんだ、と。

もちろん、そこまでは大賛成です。ですが、じゃあその図書館サービス先進国のアメリカで、情報の自由を基盤とした民主主義によって選出された輩が、ああいうことを言ったりやったりしてるってゆうんであれば、図書館ってのはいったいなんなんだ。(2003. 3. 30)

えがみ としのり (京都大学附属図書館電子情報掛)



連載コーナー 大図研京都数珠つなぎ 第 65 回

京都ノートルダム女子大学学術情報センター図書館

たに あいこ
谷 愛子さん



大図研のみなさま、はじめまして。京都ノートルダム女子大学学術情報センター図書館の谷愛子と申します。昨年末に入会させて頂いた新入りです。入会のタイミングが絶妙だったため、忘年会のお誘いを頂き、素直に参加させて頂いたのが最初の行事参加でした。そして今回数珠つなぎの原稿を、とご依頼頂きました。忘年会で、「もう一巡した」なんて言葉がこっそり耳に入ってきたので、もしかしたら来るかも・・・と恐れていたそのとおりでした。自己紹介代わりに一席お付き合いを。

私は、今の職場で働き出して、まる4年が過ぎたところです。その前は主に公共図書館をお客さんにして目録データや本を売る会社で働いていました。そこの大学図書館担当の部署で主にNACSIS-CATの代行登録+ダウンロードやローカルデータの作成の仕事をしていました。会社内での作業が多かったのですが、時々大学図書館へお邪魔して作業をすることもあり、今思えばいろいろな大学図書館の事務室や書庫に入れてもらう得がたい経験をしました。新設のきれいで明るい図書館は、作業がしやすいことが多く、仕事をするには都合がいいことが多かったのですが、出来てから年数が経って、書庫増設を繰り返し、バリアフリーってなんですかあ？みたいな図書館のほうそれぞれ独特の雰囲気があって仕事に行くのが楽しみでした。

そんななかで素敵な図書館員の方々と接するうちに図書館での仕事に憧れるようになり、転職を試みなさんの仲間入りをすることにしました。・・・というのは主たる理由ではあるので

すが、ホントのところは・・・もう仕事しんどい！！営業はムリムリな仕事ばかり取ってくるし、客はヘンテコな仕様（装備やローカルデータの仕様が公共に比べて大学はむちゃくちゃ細かいのです・・・）押しつけてくるし、納期きついし死にそう！それにくらべりや大学図書館員ってすっごい楽そうやん、給料下がってもいいや、京都にも帰れるし、もういいや、って気持ちも少しだけあったかもしれません。もうあまり覚えてませんが。

それで転職してみれば、はい、私が間違っておりました。こっちはこっちで大変でした。NACISIS-CATの目録なら目つぶってでも取れる熟練工ですが、他は素人。司書資格も通信教育やっつけで取っただけ。なのに、専任4人の図書館じゃ、本の発注から目録作成からオリエンテーションもホームページも一緒にやっつけないといけないし、カウンターの当番もあるし、おまけに入学式だ、卒業式だ、オープンキャンパスだ、と大学の行事にまでたびたび駆り出されるわで慢性的に頭混乱気味です。みなさん、どうやっていっぺんにいろんな仕事片付けてらっしゃいますか？また機会があればお話聴かせてください。

図書館ネタで、気になっていることはいくつかあるのですが、自分が以前外注業者だったこともあって、その辺の話題は気になります。主に私立大学図書館の経営面からみた、外注や委託の話題で「専門的な仕事も派遣・委託職員に任せています、これで専任職員が異動しても、コストを余計にかけることなく専門性が維持できます。」というような話を聴くたびに、ああそういうやり方もあるのか、なるほどと感心しながらもどうしても気にかかるのは、そこで実際に働いている人たちのギャラはどうなってんの？ということです。うちに来てもらってる派遣さんは、補助的な仕事を主にやってもらっていますが、正直高くはない時給で働いてもらっていて、しかも1年契約。大学の方針とはいえ、申し訳ない気持ちになるときがたまにあります。もしフルタイムの職員がやっていたような専門的な仕事を委託や派遣の方が任されているなら、その方々は仕事の専門性に見合っただけの待遇をうけているのかな？と気になります。体よく安く使われてるなら、これまた気の毒であり問題であるなあという気持ち半分、条件によっては、私もまた身の振り方考え直そうかしら、という気持ちも半分あったりなかったり、というところ です。

以上、とりとめない文章失礼いたしました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

支部委員からひとこと(2)

■呑海沙織（京都大学 人間・環境学研究所・総合人間学部図書館参考調査掛）【全国委員／研究企画／支部報編集・印刷担当】

私は現在3つの刊行物の編集・企画に携わっています。国立国会図書館編・日本図書館協会の「カレントアウェアネス」、日本図書館研究会の「図書館界」、そしてこの「大学図書館問題研究会・京都」です。同じ図書館関係の刊行物とはいえ、それぞれ異なった特徴をもっています。「カレントアウェアネス」は、国内外の図書館界及び図書館情報学の動向を紹介する依頼原稿によって構成されていますが、「図書館界」は基本的に、査読を経た投稿論文によって構成されています。そして、この「大学図書館問題研究会・京都」は、情報交換やスキルアップを目的とした大図研京都支部の支部報です。

会員の皆様からの活発なご投稿により、誌面をにぎわすことができればいいのですが、支部委員が持ち回りで書いたり、会員の方をお願いして原稿を集めたりしているのが現状です。時間の流れが早い今、不可変な紙面に文章を書くのは大変なことかもしれません。けれども、文章を書くということは、自らの思いや意見を表出するだけでなく、自らの思いや意見の中に新たなものを発見し、より深めていくということだと思えます。変化が激しい時期だからこそ、

少しずつ、思いや考えを文章という形にしてみたいかがでしょうか。形に表すことによって、新たに開けるものがきっとあるはずですよ。

気軽に書ける身近な媒体、これこそが、この支部報の一番の特徴です。みなさまの原稿、お待ちしております。

■赤澤久弥(京都大学工学研究科・工学部電気系図書室)【研究企画/HPとML担当】

2月の週末に沖縄へ行ったとき、おりしも開催されていた『史料が語る琉球：平成14年度琉球大学附属図書館貴重書展』をのぞくことができました。飛行機で2時間余りとはいえ、そうそう行けるものでもありませんし、ちょうどよい巡り合わせでした。そこで簡単ながら、その展示会の様子などをお伝えしようと思います。展示内容は、沖縄学者として有名な仲原善忠や伊波普猷らの関係資料から始まり、琉歌(琉球語で作られた和歌に対応する文学)、琉球音楽の楽譜である工工四(くんくんしー、と読むそうです)、琉球風俗を描いた絵巻、書跡や琉球版(琉球時代の刊本)など芸能・文化関係の史・資料、また琉球王府関係の文書類や江戸上り(幕藩体制下、琉球王や徳川将軍の代替わり時に江戸へ送られた使節)関係史料まで、「琉球」をわかりやすく一覧できるものです。E.R.ブール(大正時代に沖縄で活動した宣教師)が撮影・収集した、彩色ガラス写真のコレクションも展示に色を添えていました。それから、会場内のパソコンコーナーでは、琉大附属図書館の電子図書館サービスによる、沖縄関係電子化資料に触れることができるようになっていました。展示会冊子には、これについて「将来的には、これら電子化資料を利用した研究の成果も取りこみ、個々に作成された電子化資料も有機的に統合した「沖縄学総合データベース」の構築を目指している」という言葉があります。近頃「電子図書館」としての貴重資料電子化は、さほど珍しいものではなくなってきていますが、地域に根差したポリシーの表明として、「(電子)図書館」のひとつの方向性を示しているようにも思いました。また今回、とくにおもしろく思ったのは、那覇の繁華街にある“リウボウ”というデパートの展示ホールで、開催していることです。図書館開催の展示会というと、会場も図書館内なのがふつうかと思いますが、京都で言えば、大丸や高島屋を会場にしているようなものではないでしょうか(もちろん入場は無料です)。この会場で展示会が行われたのは、昨年に続いて2回目とのこと、1回目には二千人を超える入場者があったそうです。貴重資料の保存とともに、それら実物を展覧することで「モノ」が語る力を伝えるということは、図書館の重要な機能の一つかもしれません。そうした意味はもちろん、より広く見てもらえる機会や場所を積極的に創るということは、地域の中の大学のあり方として、またここでの大学図書館の外への見せ方、プロモーションとしても、たいへん興味をひかれた次第です。

追伸：もちろん、夜は夜で、美味しいゴーヤーチャンプルーや泡盛にたいへん興味をひかれたのですが、その話はまた別の機会？に。

琉球大学附属図書館貴重書展のお知らせ：<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/oshirase/arch2002/os015.html>

琉球大学附属図書館電子化資料：<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/>

■吉田 誠(京都工芸繊維大学附属図書館情報サービス係)【HPとML担当/財政担当】

最近はどうでもないが、ひところシリアル・クライシスという言葉をよく耳にした。釈迦に説法だが、図書館の資料費が削られているところに急騰する雑誌費が襲いかかる。結果、購読誌が大幅にカットされるという困った問題である。図書館関係者の所感に触れる機会も多かったが、営利出版社許すまじ、という反応が少なからずあったように記憶している。学术论文は、営利などこれっぽっちも考えていない学者が執筆したものである。それを出版社がべらぼうな金額で売りつけてくる。そこが苛立ちの源かと思うのだが、当時の私はその立場に違和感を感じていた。学者と出版社で著作権の譲渡契約が完了している以上、論文を自由にできるのは出版社だけ。独占市場下の営利企業に譲渡しているのだから、吹っかけてくるのは当然、今さら怒ってもと、そう考えていたと思う。

そのように考えるのは、学生時代に法律の授業で現代社会の紛争を処理する裁判所では、権利を持つものが最終的に勝つことになる、こう覚えていたことと無関係ではないと思う。雑誌

の価格設定に対する考え方は今も変わっていないが、著作権は私の学生時代から5年近く経とうとしているが、識者の一部からはデジタル技術の進展により、消滅していくという見方も出てくるなど、変化が著しいように見える。

図書館は様々な形で知的生産物が交差するところである。当然著作権も様々にクロスする。変容しつつある著作権が図書館というシステムの中で、学術コミュニケーションにどのような影響を及ぼしていくのか。学生時代の試験では先生のお説を写していれば事足りたが、今はそうは行かない。楽しいようでもあり、難儀なことでもある。

■井上敏宏（京都大学附属図書館情報サービス課参考調査掛）【支部報編集・印刷担当】

2月28日、「国立大学法人法案」が閣議決定されました。法案では「国立大学及びその附属学校の授業料その他の費用に関し必要な事項は、文部科学省令で定めるものとする」とされているものの、公正取引委員会は国立大学協会に「授業料を一律にするようなことは問題になる」とクギを刺したということです。

図書館においてはあまり大きな収入というものはないですが、少額ながら文献複写の収入があります。今まで国立大学での複写サービスは文部科学省で一律に決められていて、館独自には設定するようなことはありませんでした。現在の料金が電子複写1枚につき、学外者の場合35円、学内者の場合20円となっています。この料金を決めるにはそれ相当の検討はなされたようですが、今どきの感覚からするとやはり高いです。自分自身が高いと思いがちですが、利用者の方に「何故こんなに高いのですか」と言われると「国の機関ですから」「定められた料金に従っています」のようにしか答えようがありませんでした。

ところが授業料は今後、大学あるいは学部によっても料金に違いが出てくる可能性があるらしい。それでは文献複写の料金はどうなるのだろう。儲け重視の図書館などが出てくるのだろうか。さすがに著作権法があるので、それはないかもしれないが一律料金ということはなくなる可能性が高い。このことを良いとか悪いとか云々するつもりはないですが、何だか複雑な気分のする今日このごろです。

2002年度会費納入のお願い

春光うららかな今日この頃、会員の皆様におかれましてはご健勝のことと存じます。2002年度大図研会費及び支部会費の納入状況をお知らせいたします。すでに年度も3分の2を過ぎていますが4月9日現在で納入率はようやく約5割という状況にあり、なかなか数字がのびません。

会費納入率の低下は大図研の活動に影響を与えるだけでなく、支部セミナーなどにも悪影響を及ぼします。納入いただいていない会員の皆様におかれましては、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願いいたします。

記

大学図書館問題研究会会費	¥5,000
京都支部会費	¥2,000
合計	¥7,000

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員にことづけていただきますようお願いいたします。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は京都支部財政担当・吉田（京都工芸繊維大学）までお願いいたします。

myos@m02.mbox.media.kyoto-u.ac.jp